

ヤングケアラーとしての自己認識
～大阪府立高校の生徒を対象とした質問紙調査～

**Self-Identification as Young Carers:
A Questionnaire Survey Conducted on
Osaka Prefectural High School Students**

宮川 雅充¹・濱島 淑恵²

Masamitsu Miyakawa and Yoshie Hamashima

‘Young carers’ are children who take on caring responsibilities that would normally be expected of adults: for example, provide housework, care, assistance, or emotional support to a family member. While the 2011 census revealed that there were approximately 166,000 young carers (aged 5-17 years) in England, little is known about young carers in Japan. To investigate the status of young carers in Japan, we conducted a questionnaire survey on 6,160 Osaka prefectural high school students from ten schools. A total of 5,246 valid questionnaires were collected; however, our analyses were limited to the 5,128 questionnaires that included all the required information. From the responses to the questions about their caring role, it was discerned that 5.0% of high school students provided care for their family members with a disability, an illness, or other special needs such as a language barrier. After defining young carers, we also asked the students whether they self-identified as such. The analysis of the responses to this self-identification question, in relation to their caring role, revealed the following results: (1) 4.0% of high school students self-identified as young carers, but the self-identification did not necessarily correspond with their caring role; (2) 16.7% of high school students who provided care for their family members with a disability, an illness, or other special needs self-identified as young carers, 26.8% did not self-identify, and 56.4% answered ‘I don’t know’; and (3) 3.2% answered that they considered themselves young carers despite reporting that there were no family members who needed care, assistance, or support (namely, they did not provide care). The results imply that students who are, in fact, young carers may be reluctant to disclose challenges faced by their family members. The results also suggest that most high school students who provide care for a family member do not identify themselves as young carers or may not realise that their life is different from that of their peers who do not act as carers. It is reasonable to conclude that many young carers in Japan might remain hidden from society.

キーワード：ヤングケアラー、高校、自己認識、家族介護者、子ども

Key Words : Young Carers/Young Caregivers, High School, Self-Identification,
Family Carers / Family Caregivers, Children

1 関西学院大学総合政策学部 教授

2 大阪歯科大学医療保健学部社会福祉士コース 准教授

1. 序論

家族内に、障がい、疾病を有する、日本語を第一言語としない等の理由で何らかのサポートを必要とする者(以下、要ケア家族)がいる場合、子どもが、家事、介護、精神的サポート、年下のきょうだいの世話、通訳等(以下、ケア)を担っていることがある。このような子どもたちを「ヤングケアラー(Young Carer)」と呼び、その実態把握や支援の必要性を指摘する動きがある。ヤングケアラーとは、日本ではまだ統一された定義はないが、日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト(2015)は「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」としている。

諸外国では、ヤングケアラーに関する調査研究が進められている³。例えばイギリスでは、Englandに約16万6千人のヤングケアラーが存在していることが報告され(Office for National Statistics, 2011)、彼らが抱える問題(健康面、人間関係、学業、人生設計等において問題が生じる場合がある等)やプラスの側面(生活能力の修得、自尊心、家族との絆等)が先行調査、研究で議論されている(例えば、Dearden and Becker, 2004; Clay *et al.*, 2016)。

一方、日本においては、「平成29年就業構造基本調査」(総務省)が、普段、家族の介護をしているかを尋ねている。公表されている統計表によると、15歳から30歳未満で家族の介護をしている者が21万100人存在することがわかるが、ヤングケアラーの実態を把握するには十分とは言い難

く、詳細な調査が必要とされている。このような状況の下、近年では小・中学校の教員、福祉専門職に対する質問紙調査を通して、ヤングケアラーの実態把握を試みる調査研究(日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト 2015; 北山・石倉 2015; 澁谷 2014a)が行われており、ヤングケアラーの存在割合、ケアの状況、彼らの年齢、性別、家族構成による特徴、学校生活への影響等について論じられている。また、ヤングケアラー自身に対するインタビュー調査も行われている(土屋 2006; 森田 2010; 澁谷 2012; 澁谷 2014b)。一方で、子ども自身を対象とした質問紙調査も行われている。2016年に著者らは、日本におけるヤングケアラーの実態を明らかにすることを目的として、大阪府の公立高校の生徒を対象に質問紙調査を実施し、既報において、ヤングケアラーの存在割合と、彼らの担うケアの集計結果(対象・内容・時間・頻度)について報告している(濱島・宮川 2018)。以上のように、日本においてもヤングケアラーに関する調査研究が着手されているが、その実態については、まだ十分に明らかになっていないのが現状である。

一般的に子どもは、ケアを担う者というよりは、ケアを受ける者と認識されやすく、ヤングケアラーについては、彼らの存在、抱えている困難が表面化しにくいことが指摘されている。その中では、ヤングケアラーは、本人が自身をヤングケアラーだとは認識していない場合や、自身をヤングケアラーだとは思いたくない場合があること、子どもがケア役割を担っていたとしても彼らが学校や地域などに状況を伝えている場合は必ずし

3 Cree (2003), Dearden and Becker (2004), Moore (2005), National Alliance for Caregiving in collaboration with United Hospital Fund (2005), Pakenham and Bursnall (2006), Siskowski (2006), Becker (2007), Diaz *et al.* (2007), Moore and McArthur (2007), Pakenham *et al.* (2007), Warren (2007), Schlarman *et al.* (2008), Cass *et al.* (2009), Joseph *et al.* (2009), Skovdal and Andreouli (2011), Office for National Statistics (2011), Smyth *et al.* (2011a), Smyth *et al.* (2011b), Cohen *et al.* (2012), Marote *et al.* (2012), Pakenham and Cox (2012), Sieh *et al.* (2012), Cassidy and Giles (2013), Heyman and Heyman (2013), Lloyd (2013), Nichols *et al.* (2013), The Children's Society (2013), Bjorgvinsdottir and Halldorsdottir (2014), Cassidy *et al.* (2014), Nagl-Cupal *et al.* (2014), Pakenham and Cox (2015), Stamatopoulos (2015), Assaf *et al.* (2016), Clay *et al.* (2016), Kavanaugh *et al.* (2016), Stamatopoulos (2016), Chadi and Stamatopoulos (2017), Chikhradze *et al.* (2017), Kallander *et al.* (2018), などがある。

表1. 質問Dの概要

質問	内容 ^{*1}	選択肢・調査票の分岐構造
D1	別居している家族も含め、家族に、介護等を必要としている人(要ケア家族)がいるか	・ 選択肢は、「1. はい」「2. いいえ」「3. わからない」 ・ 「1. はい」と答えた場合のみD2へ進む。 ・ 「2. いいえ」あるいは「3. わからない」と答えた場合、質問Eへ進む。
D2	D1で答えた要ケア家族は誰か	略
D4	要ケア家族の状態	略
D6	要ケア家族のために回答者が介護等をしているか	・ 選択肢は、「1. している」「2. していない」 ・ 「1. している」と答えた場合、D7へ進む ・ 「2. していない」と答えた場合、質問Eへ進む。
D7	回答者がしている要ケア家族のための介護等の内容	略
D10	回答者がD7で答えた介護等をしている頻度	・ 選択肢は、「1. 毎日」「2. 週に4、5日」「3. 週に2、3日」「4. 週に1日」「5. 1か月に数日」「6. 1年に数日」「7. その他」
D11	回答者がD7で答えた介護等をしている時間(1日あたり)(学校がある日、ない日それぞれ)	・ 選択肢は、「1. 8時間以上」「2. 6時間以上8時間未満」「3. 4時間以上6時間未満」「4. 2時間以上4時間未満」「5. 1時間以上2時間未満」「6. 1時間未満」「7. その他」

※1 質問内容は、適宜、要約している。調査票では「介護、お手伝い、精神的サポート」としているが、表中では、すべて「介護等」と略す。

も多くなか、サポートへとつながりにくいこと、などが指摘されている(例えば、Dearden and Becker, 2004; The Children's Society, 2013; Clay *et al.*, 2016; Chikhradze *et al.*, 2017)。

以上を踏まえると、ヤングケアラー自身の自己認識が、ヤングケアラーの早期発見や支援の実現には、重要になると考えられる。既に述べた、著者らが2016年に実施した質問紙調査では、ヤングケアラーという言葉の認知(ヤングケアラーという言葉聞いたことがあったか)とヤングケアラーとしての自己認識(自身をヤングケアラーだと思うか)についても尋ねている。本稿では、ヤングケアラーという言葉の認知および彼らが担っていると回答したケアの状況との関連を分析した結果をもとに、高校生のヤングケアラーとしての自己認識の実態について考察を行う。

2. 方法

2.1 調査方法

2016年1月～12月に、大阪府下の公立高校において、生徒を対象とした質問紙調査を実施した。13校に調査の協力を依頼し、その結果、10校の協

力を得ることができた。

高校の所在エリアは、北摂エリアが2校、河内エリアが3校、大阪市内が4校、泉州エリアが1校であった。また、高校偏差値ランキング⁴によると、60以上が2校、50～59が2校、40～49が2校、40未満が4校であった(「普通科」の偏差値)。

10校の生徒6,160名が調査対象となった。調査票の配布、回収は高校に依頼した。

2.2 調査項目

調査票は、A～Eの5項目からなり(A. 回答者の基本属性、B. 日常生活、C. 学校生活、D. 家族に対するケア、E. ヤングケアラー)、質問Aから順に、質問B、C、D、Eの順で回答する構造となっている。以下、本稿と関わる主な質問について述べる。

質問Aにおいて、性別を尋ねた。

質問Dでは、家族に対するケアについて尋ねた。表1に、本稿と関わる部分について、質問Dの概要を示す。最初に、質問D1で、別居している家族も含め、家族に、高齢である、幼い、病気や障がいがある、日本語が第一言語でない等のた

4 2017年5月に、高校偏差値.net. (<http://高校偏差値.net/osaka.php>、2017年5月25日アクセス可能)において、調べた偏差値である。

めに、介護、お手伝い、精神的サポートを必要としている人(要ケア家族)がいるかどうかを尋ねた。選択肢は、「1. はい」「2. いいえ」「3. わからない」であり、いずれか1つを選択してもらった。この質問に「1. はい」と答えた者のみが質問D2へ進み、「2. いいえ」「3. わからない」と答えた者は、質問Eへ進む構造になっている。質問D2～D5では、質問D1で答えた要ケア家族は誰か、要ケア家族の状態などを尋ね、質問D6で、要ケア家族のために、回答者自身が介護、お手伝い、精神的サポートをしているかを尋ねた。質問D6の選択肢は、「1. している」「2. していない」であり、いずれか1つを選択してもらった。この質問に「1. している」と答えた者のみが質問D7へ進み、「2. していない」と答えた者は、質問Eへ進む構造になっている。質問D7～D11では、回答者がしている要ケア家族のための介護、お手伝い、精神的サポートの内容、頻度、1日あたりの時間(学校がある日、ない日それぞれ)等を尋ねた。質問Dは質問D14までであり、最終的には、回答者全員が質問Eへ進む構造となっている。

質問Eでは、ヤングケアラーについて尋ねた。最初に質問E1において、「ヤングケアラー」という言葉の意味を示したうえで、ヤングケアラーという言葉の認知を尋ねた。質問文は、以下の通りである。

何らかの援助が必要な家族のために、家事、介護、世話、精神的なサポート等をする子ども達のことを「ヤングケアラー」といいます。あなたはこの言葉を、以前に聞いたことがありましたか(○は1つ)。

選択肢は、「1. 聞いたことがあった」「2. 聞いたことがなかった」であり、あてはまると思うものを1つ選んでもらった。

次に、質問E2で、ヤングケアラーとしての自己認識を尋ねた。質問文は、以下の通りである。

あなたは、自分を「ヤングケアラー」だと思えますか(○は1つ)。

選択肢は、「1. はい」「2. いいえ」「3. わからない」であり、あてはまると思うものを1つ選んでもらった。

2.3 倫理的配慮

本研究について、「関西学院大学 人を対象とする行動学系研究倫理委員会」の審査を受け、承認された後に、調査を開始した(受付番号:2015-36/承認年月日:2015年12月9日)。調査の実施にあたり、各高校の校長に、調査の目的、調査の内容、プライバシーの保護等について説明し、研究への協力を求めた。

調査票は回収用封筒と一緒に生徒に配布し、回答後、生徒自身が封筒へ入れ、厳封した状態での回収を依頼した。調査票の表紙に、調査協力は任意であること、回答したくない質問には回答する必要のないこと等、プライバシーに対する配慮を明記するとともに、調査票の配布・回収を行う教員に対する依頼文書において、生徒に対するその周知徹底を依頼した。また、その依頼文書の中で、誰がどのような回答をしたのかは、他の人が知ることは決してなく、高校の教員が見ることもないことを生徒に伝えるように依頼した。さらに、生徒のプライバシーを守るため、教室を巡回しない、あるいは、巡回したときに生徒の回答が目に入らないようにする等の配慮を要請した。

2.4 統計解析手法

すべての質問について、単純集計を行った。

ケアの状況については、質問Dの回答にもとづき、表2に示す5カテゴリに分類した。まず、要ケア家族(質問D1)に関する回答にもとづき、I(いない)、II(わからない)、III(いる)の3群に分類した。また、IIIについては、回答者自身がケアを担っているか(質問D6)にもとづき、III-a(していない)、III-b(している)の2群に分類した。さらに、III-bについては、要ケア家族は誰かを尋ねた質問(質

表2. 要ケア家族の状況と回答者が担うケア役割に関する回答結果(質問D)

カテゴリ	要ケア家族	回答者が担うケア	要ケア家族の障がい・疾病等の有無 ^{*1}	男性 人数(割合)	女性 人数(割合)	全体 人数(割合)
I	いない			1,723(79.8%)	2,317(78.0%)	4,040(78.8%)
II	わからない			218(10.1%)	247(8.3%)	465(9.1%)
III-a	いる	していない	－	107(5.0%)	210(7.1%)	317(6.2%)
III-b-1	いる	している	なし ^{*2}	9(0.4%)	40(1.3%)	49(1.0%)
III-b-2	いる	している	あり	102(4.7%)	155(5.2%)	257(5.0%)
計				2,159(100%)	2,969(100%)	5,128(100%)

カテゴリ III-b-2をさらに2群に分類						
a) 週に4、5日以上ケア						
	非該当			56(2.6%)	81(2.7%)	137(2.7%)
	該当			46(2.1%)	74(2.5%)	120(2.3%)
(b) 学校のある日に2時間以上のケア						
	非該当			81(3.8%)	116(3.9%)	197(3.8%)
	該当			21(1.0%)	39(1.3%)	60(1.2%)
(c) 学校のない日に4時間以上のケア						
	非該当			83(3.8%)	113(3.8%)	196(3.8%)
	該当			19(0.9%)	42(1.4%)	61(1.2%)

※1 要ケア家族の状態が、障がいまたは疾病がある、日本語を第一言語としない等の状態であるか否か

※2 障がいまたは疾病がある、日本語を第一言語としない等の状態ではなく、単に幼いきょうだいがいるという理由のみでケアをしていると考えられる者

問D2)で「弟・妹」のみを選択しており、かつ、要ケア家族の状態を尋ねた質問(質問D4)で「まだ幼いため世話が必要である」のみを選択していた者(III-b-1)と、それ以外の者(III-b-2)の2群に分類した⁵。

さらに、カテゴリ III-b-2を、(a) 週に4、5日以上ケアを担っている、(b)学校のある日に2時間以上のケアを担っている、(c)学校のない日に4時間以上のケアを担っている、という3つの判断基準に該当するかどうか(質問D10、D11)にもとづき、さらに2群に分類した分析も行った。

ヤングケアラーという言葉の認知(質問E1)、および、ヤングケアラーとしての自己認識(質問E2)について、ケアの状況との関連を分析した⁶。

また、ヤングケアラーとしての自己認識を目的変数、性別、ヤングケアラーという言葉の認知、

ケアの状況、学校⁷を説明変数とした多項ロジスティック回帰分析を行った。目的変数の基準カテゴリは、ヤングケアラーとしての自己認識に関して「2. いいえ」と回答した群とした。

統計解析は、Stata/SE 15.1により行った。統計学的有意水準は5%とした。

3. 結果

3.1 回収結果および分析対象

調査対象のうち、5,749名に調査票を配布することができ、5,671票の調査票が回収された。調査への協力が得られた(白紙ではなかった)5,500票のうち、本調査の主題である質問 Dに何らかの回答をしていることを条件に、本質問紙調査の有効回答を決定した。有効回答は、5,246票となった。

5 脚注13を参照されたい。

6 性別によって関連の仕方が異なるかどうかを確認するために、男性のみを対象とした場合、女性のみを対象とした場合の分析についても行ったが、顕著な差は認められなかった。よって、本稿では、全体を対象とした分析結果のみを示す。

7 本研究のデータは、階層構造をもっている。すなわち、レベル1が生徒、レベル2が学校という構造になっているため、学校をクラスタとしたロバスト標準誤差やマルチレベル分析の適用も考えられるが、これらの分析を行うためには10という学校数は必ずしも十分ではない。ここでは、グループレベル(レベル2)の変数の影響を検討することが本稿の目的ではないことについても考慮したうえで、学校を説明変数とし、学校の影響を調整した分析を行うこととした。

さらに、本稿で使用する変数に欠損値がないことを条件に、本稿における分析対象を決定した。分析対象は、5,128票となった⁸。

3.2 ケアの状況

表2に、質問Dの回答結果から明らかとなった、要ケア家族の状況と回答者が担うケア役割を示す。

要ケア家族はいないと回答した者(カテゴリⅠ)が4,040名(78.8%)であり、大多数をしめていた。要ケア家族がいるかどうかかわからないと回答した者(カテゴリⅡ)は465名(9.1%)であった。

一方で要ケア家族がいると回答した者は、623名(12.1%)であった(カテゴリⅢ)。そのうち回答者自身がケアを担っていると回答した者(カテゴリⅢ-b)は、306名(6.0%)であった。なお、そのうち、49名は、要ケア家族(質問D2)で「弟・妹」のみを選択しており、かつ、要ケア家族の状態(質問D4)で「まだ幼いため世話が必要である」のみを選択していた(カテゴリⅢ-b-1)。カテゴリⅢ-b-1の49名(1.0%)は、幼いきょうだいがいるという理由のみでケアをしていると考えられるため、それ以外(カテゴリⅢ-b-2)の257名(5.0%)とは区別して結果をまとめた⁹。

カテゴリⅢ-b-2をさらに2群に分類した結果、週に4、5日以上ケアを担っている者が120名(2.3%)、学校のある日に2時間以上のケアを担っている者が60名(1.2%)、学校のない日に4時間以上のケアを担っている者が61名(1.2%)いることがわかった。

3.3 ヤングケアラーという言葉の認知

ヤングケアラーという言葉の認知(質問E1)について、「聞いたことがあった」と回答した者は87

名(1.7%)であった。

表3に、ヤングケアラーという言葉の認知について、ケアの状況との関係を示す。カテゴリⅠ～Ⅲ-b-2の5群で、ヤングケアラーという言葉の認知を比較した結果、有意な差が認められた(Fisherの正確検定： $p<0.001$)。さらに、カテゴリⅢ-b-2を3つの判断基準で2群に分けた場合(全体で6群)においても、いずれの場合も、有意な関係が認められた(Fisherの正確検定： $p<0.001$)。

カテゴリⅢ-b-2では、「聞いたことがあった」と回答した者の割合が5.8%であり、他のカテゴリと比較して高いことが確認された。また、カテゴリⅢ-b-2を3つの判断基準で、さらに2群に分けた場合、より負担の大きいケアを担っていると考えられる群において、「聞いたことがあった」と回答した者の割合が高かった。

3.4 ヤングケアラーとしての自己認識とその関連要因

ヤングケアラーとしての自己認識(質問E2)について、203名(4.0%)が「はい」を選択し、自身をヤングケアラーだと思うと回答していた。2,803名(54.7%)が「いいえ」を選択し、自身がヤングケアラーとは思わないと回答したのに対し、2,122名(41.4%)が「わからない」と回答していた。

表4に、ヤングケアラーとしての自己認識について、ケアの状況との関係を示す。カテゴリⅠ～Ⅲ-b-2の5群で、ヤングケアラーとしての自己認識を比較した結果、両者の間には有意な関係が認められた(χ^2 検定： $p<0.001$)¹⁰。さらに、カテゴリⅢ-b-2を3つの判断基準で2群に分けた場合(全体で6群)においても、いずれの場合も、有意な関係が認められた(χ^2 検定： $p<0.001$)¹¹。

8 ヤングケアラーの年齢については、18歳未満とする場合もある(例えば、Office for National Statistics, 2011; 日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト 2015)。分析対象者の中には、18歳以上の者も存在したが、本稿では、同じ高校生として、それらの者を除外することはせずに分析を行うこととした。

9 脚注13を参照されたい。

10 Fisherの正確検定を試みたが、計算時間の関係で、結果を得るに至らなかった。よって、ここでは χ^2 検定の結果を記している。

11 脚注10と同様である。

表3. ヤングケアラーという言葉の認知とケアの状況との関係

カテゴリ(表2参照)	人数	ヤングケアラーという言葉の認知に関する回答	
		聞いたことがあった	聞いたことがなかった
I	4,040	60(1.5%)	3,980(98.5%)
II	465	4(0.9%)	461(99.1%)
III-a	317	8(2.5%)	309(97.5%)
III-b-1	49	0(0.0%)	49(100%)
III-b-2	257	15(5.8%)	242(94.2%)
計	5,128	87(1.7%)	5,041(98.3%)
カテゴリIII-b-2をさらに2群に分類			
(a) 週に4、5日以上ケア			
非該当	137	2(1.5%)	135(98.5%)
該当	120	13(10.8%)	107(89.2%)
(b) 学校のある日に2時間以上のケア			
非該当	197	1(0.5%)	196(99.5%)
該当	60	14(23.3%)	46(76.7%)
(c) 学校のない日に4時間以上のケア			
非該当	196	3(1.5%)	193(98.5%)
該当	61	12(19.7%)	49(80.3%)

表4. ヤングケアラーとしての自己認識とケアの状況との関係

カテゴリ(表2参照)	人数	ヤングケアラーとしての自己認識に関する回答		
		はい	いいえ	わからない
I	4,040	129(3.2%)	2,423(60.0%)	1,488(36.8%)
II	465	14(3.0%)	122(26.2%)	329(70.8%)
III-a	317	12(3.8%)	176(55.5%)	129(40.7%)
III-b-1	49	5(10.2%)	13(26.5%)	31(63.3%)
III-b-2	257	43(16.7%)	69(26.8%)	145(56.4%)
計	5,128	203(4.0%)	2,803(54.7%)	2,122(41.4%)
カテゴリIII-b-2をさらに2群に分類				
(a) 週に4、5日以上ケア				
非該当	137	9(6.6%)	44(32.1%)	84(61.3%)
該当	120	34(28.3%)	25(20.8%)	61(50.8%)
(b) 学校のある日に2時間以上のケア				
非該当	197	25(12.7%)	56(28.4%)	116(58.9%)
該当	60	18(30.0%)	13(21.7%)	29(48.3%)
(c) 学校のない日に4時間以上のケア				
非該当	196	25(12.8%)	58(29.6%)	113(57.7%)
該当	61	18(29.5%)	11(18.0%)	32(52.5%)

しかし、ヤングケアラーとしての自己認識は、高校生が回答したケアの状況とは必ずしも一致していなかった。要ケア家族がいて自身がケアを担っていると回答した群(カテゴリIII-b-2)では43名(16.7%)が自身をヤングケアラーだと思うと回答していたが、69名(26.8%)は「いいえ」と回答し、

自身がヤングケアラーだとは思わないと回答していた。また、半数以上にあたる145名(56.4%)が「わからない」と回答していた。一方で、自身の家族に要ケア家族がいることを否定した群(カテゴリI)では、129名(3.2%)が、ヤングケアラーという言葉の意味を示されたうえで、自身をヤングケ

表5. ヤングケアラーとしての自己認識に関する多項ロジスティック回帰分析の結果

	ヤングケアラーとしての自己認識			
	「わからない」(n=2,122)		「はい」(n=203)	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差
性別(女性ダミー)	-0.010	0.061	-0.255	0.152
ヤングケアラーという言葉の認知(「聞いたことがあった」ダミー)	-0.204	0.250	1.193***	0.351
ケアの状況(表2参照、基準カテゴリ：I)				
II	1.365***	0.113	0.765*	0.298
III-a	0.151	0.122	0.256	0.314
III-b-1	1.309***	0.336	2.108***	0.540
III-b-2(週4、5日以上ケア：非該当)	1.101***	0.192	1.355***	0.379
III-b-2(週4、5日以上ケア：該当)	1.309***	0.242	3.115***	0.285
学校(基準カテゴリ：高校A)				
高校B	0.917***	0.180	-0.482	0.552
高校C	-2.528***	0.730	-1.089	1.029
高校D	-0.076	0.102	-0.225	0.238
高校E	0.639***	0.150	0.231	0.341
高校F	0.727***	0.128	-0.147	0.336
高校G	0.091	0.120	-0.383	0.298
高校H	0.227*	0.106	-0.174	0.258
高校I	-0.046	0.101	-0.231	0.240
高校J	0.945**	0.313	-0.408	1.048
定数項	-0.611***	0.083	-2.649***	0.188
分析対象者数			5,128	
対数尤度			-3958.6	
McFadden R ²			0.062	

*: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001

目的変数の基準カテゴリは「いいえ」(n=2,803)

アラーだと思うと回答していた。また、自身の家族に要ケア家族がいるかどうか「わからない」と回答した群(カテゴリII)においても、自身をヤングケアラーだと思うと14名(3.0%)が回答していた。

表5に、ヤングケアラーとしての自己認識に関する多項ロジスティック回帰分析の結果を示す。なお、この結果は、ケアの状況について、カテゴリIII-b-2を、週に4、5日以上ケアを担っているかどうかにもとづき2群に分けた6群を利用した結果である¹²。

性別については、有意な結果は認められなかった。

ヤングケアラーという言葉の認知については、自身をヤングケアラーだと思う(ヤングケアラーとしての自己認識に対して「はい」と回答する)割合については、有意な関連が認められた。ヤング

ケアラーという言葉に「聞いたことがあった」者は、「聞いたことがなかった」者と比較して、自身をヤングケアラーだと思うと回答する割合が有意に高かった。

ケアの状況については、カテゴリIIはカテゴリIと比較した場合、ヤングケアラーとしての自己認識について「わからない」と回答する割合が有意に高かった。また、同様に、「はい」と回答する割合についても、有意に高かった。カテゴリIII-aについては、カテゴリIとの間に有意な差は認められなかった。一方で、回答者自身がケアを担っていると回答した群(カテゴリIIIに含まれる3群)については、カテゴリIと比較した場合、「わからない」と回答する割合、「はい」と回答する割合のいずれも有意に高かった。特に、カテゴリIII-b-2の

12 カテゴリIII-b-2を、学校のある日に2時間以上のケアを担っているかどうかにもとづき2群に分けた場合、学校のない日に4時間以上かどうかにもとづき2群に分けた場合の分析もそれぞれ行ったが、表4から推測されるとおり、ほぼ同様の結果であったため、ここでは割愛する。

うち、より負担の大きいケアを担っている(週4、5日以上)のケアを担っている)者については、「はい」と回答する割合が特に高くなっていた。

4. 考察

本調査の結果では、質問Dで、要ケア家族がいて、回答者自身がケアを担っていると回答した者は、306名であった(カテゴリⅢ-b-1、Ⅲ-b-2)。そのうち、カテゴリⅢ-b-1の49名は、要ケア家族(質問D2)で「弟・妹」のみを選択しており、かつ、要ケア家族の状態(質問D4)で「まだ幼いため世話が必要である」のみを選択していた。幼いきょうだいがいるという理由のみでケアをしている者をヤングケアラーとみなすかどうかについては議論のあるところであるが、各報告におけるヤングケアラーの定義に鑑みると、これらの者については、ヤングケアラーとみなさないことが多い¹³。どの程度のケアを担っている場合にヤングケアラーとみなすかどうかについては明確な基準はなく、そのことが存在割合の比較を難しくしていることが指摘されている(Chikhradze *et al.*, 2017)が、カテゴリⅢ-b-2の者が、最も広い意味で捉えた場合の「ヤングケアラー」と考えられる。本稿の分析対象者では257名が該当し、その存在割合は5.0%と考えられた。また同様に、週に4、5日以上のケアを担っている者は120名でその存在割合は2.3%、学校のある日に2時間以上のケアを担っている者は60名でその存在割合は1.2%、学校のない日に4時間以上のケアを担っている者は61名でその存在割合は1.2%と考えられた¹⁴。カテゴリⅢ-b-2

には、多くのヤングケアラーが含まれていると考えられる。

一方で、本稿の主題は、ヤングケアラーとしての自己認識(質問E2)である。本調査では、質問Dの後に配置された質問Eにおいて、ヤングケアラーという言葉の意味を示したうえで、ヤングケアラーとしての自己認識を尋ねている。その結果では、203名(4.0%)が、自身をヤングケアラーだと思うと回答していた。ヤングケアラーとしての自己認識について、ケアの状況(質問Dの回答)との関連を分析した結果、両者の間には有意な関連が認められた(表4、5)。しかし、回答者が回答したケアの状況(質問D)とヤングケアラーとしての自己認識(質問E2)は、必ずしも一致しなかった。この点については、当然のことながら、自記式の質問紙調査という方法の限界である可能性¹⁵も考えられる。以下では、カテゴリⅢ-b-2、Ⅰ、Ⅱの3つのカテゴリのヤングケアラーとしての自己認識に注目して考察を行う。

カテゴリⅢ-b-2は、要ケア家族がおり、回答者自身がケアを担っていると回答した者である。彼らは、質問Dにおいて要ケア家族の存在、自身が担うケアの状況を回答したうえで、質問E2でヤングケアラーとしての自己認識に回答している。表4からわかるように、カテゴリⅢ-b-2の16.7%が自身をヤングケアラーだと思うと回答していた。一方で、「いいえ」と回答した者は26.8%、「わからない」と回答した者が56.4%であり、ヤングケアラーと考えられる者が多く含まれているカテゴリⅢ-b-2においても、自身をヤングケアラーだと

13 例えば、イギリスのcensus(以降、「センサス」と表記)(Office for National Statistics, 2011)では、以下のように定義されており、この定義にもとづくと、カテゴリⅢ-b-1の者は、厳密にはヤングケアラーに含まれないと考えられる。

The definition used here for a 'young carer' includes children and young people under 18-years-old (aged 5 to 17), who provided unpaid care for family members, friends, neighbours or others because of long-term physical or mental ill-health, disability, or problems relating to old age.

また、オーストラリア(Carers Australia)の定義は、以下の通り(<http://carersaustralia.com.au/about-carers/young-carers2/>、2019年4月14日アクセス可能)であり、この定義にもとづいても、カテゴリⅢ-b-1の者は、厳密にはヤングケアラーに含まれないと考えられる。

Young carers are people up to 25 years old who provide unpaid care and support to a family member or friend with a disability, a physical or mental illness, a substance dependency, or who is aged.

14 質問Dの回答結果からヤングケアラーの存在割合を考察した結果は、濱島・宮川(2018)を参照されたい

15 例えば、回答者が質問文をよく読まずに回答した可能性などが考えられる。

思う者は少なかった。なお、カテゴリⅢ-b-2において、より負担の大きいと考えられる(週に4、5日以上のケアを担っている、学校のある日に2時間以上のケアを担っている、学校のない日に4時間以上のケアを担っている)者の方が、自身をヤングケアラーだと思うと回答する割合が高くなっているが、いずれの場合も3割程度であり、多くの者は自身をヤングケアラーだとは思っていないと考えられる。このことについては、彼らの担うケア役割が、通常のお手伝いの範囲内であり、ヤングケアラーというには負担が軽度であるために、自身をヤングケアラーだと思うという回答が少なかった可能性も考えられる。その可能性を完全に払拭することはできないが、週に4、5日以上、学校のある日に2時間以上、学校のない日に4時間以上などのケアを、子どもが担っていることを通常のお手伝いと考えることは難しいと考えられる。以上のことから、自身の担っているケアの詳細を回答し、ヤングケアラーという言葉の意味を示されたうえで、なお、自身をヤングケアラーとは認識しない者が少なからず存在することが示唆された。

カテゴリⅠは、質問Dにおいて要ケア家族は「いない」と否定したうえで、質問E2でヤングケアラーとしての自己認識を回答した者である。カテゴリⅠは、表5の分析において、ケアの状況の基準カテゴリとなっているが、表4からわかるとおり、3.2%が自身をヤングケアラーだと思うと回答している。ヤングケアラーとしての自己認識に関する回答からは、彼らの家族には要ケア家族が存在することになり、かつ自身がケアを担っていることになるため、相当数の回答者が、ケアを要する家族がいることの回答を躊躇した可能性が考えられる¹⁶。

カテゴリⅡは、質問Dにおいて要ケア家族がいるかどうかについて「わからない」と回答したうえで、質問E2でヤングケアラーとしての自己認識

を回答した者である。カテゴリⅡは表5の分析において、ヤングケアラーとしての自己認識について「はい」と回答する割合が、カテゴリⅠよりも有意に高い結果となっている。このことも、カテゴリⅠの場合と同様に、ケアを要する家族がいることの回答を躊躇した者が少なからず存在したことを示唆していると考えられる。

以上の結果は、先行研究が示唆するところと通ずる点がある。ヤングケアラーについては、本人が家族の状況を隠したがる、自身をケアラーとは思っていない、自身をケアラーだとは思いたくない、スティグマやいじめに対する不安がある、サポートを受けることをためらう、ケアを担っていることを学校へは伝えておらず様々な社会資源にもつながっていない、などの場合があることが指摘されている(Dearden and Becker, 2004; Moore, 2005; Becker, 2007; Moore and McArthur, 2007; Warren, 2007; Cass *et al.*, 2009; Smyth *et al.*, 2011a; The Children's Society, 2013; Clay *et al.*, 2016; Chikhradze *et al.*, 2017)。また、国内のヤングケアラー研究においても、特に必要がなければ親の障がいについて他者にはカミングアウトしないこと(土屋 2006)、ケアをしていることを隠すこと(森田 2010)が指摘されている。

どのくらいの数のヤングケアラーが存在しているかについては、諸外国において、多くの報告がなされている(例えば、National Alliance for Caregiving in collaboration with United Hospital Fund, 2005; Becker, 2007; Cass *et al.*, 2009; Office for National Statistics, 2011; Marote *et al.*, 2012; Chikhradze *et al.*, 2017)。しかし、その数値に関しては、様々な議論がある。例えば、2011年のイギリスのセンサスでは、イングランドに約166,000人のヤングケアラーがいることが示されているが、この数値について氷山の一角であると

16 本文で、既に述べたとおり、質問紙調査という方法の限界である可能性も考えられる。

する指摘もある(The Children's Society, 2013)¹⁷。本調査の結果においても、要ケア家族がいないと回答したにもかかわらず、自身をヤングケアラーだと思つたと回答した者が相当数存在すること、要ケア家族があると回答し自身がケアを担っているにもかかわらず自身をヤングケアラーだとは思わないと回答した者が相当数存在することなど、社会において見えない状態になっているヤングケアラーが存在することが示唆された。

表5から、ヤングケアラーという言葉で「聞いたことがあった」者は、自身をヤングケアラーだと思つたと回答する割合が高くなることが示唆された。「聞いたことがあった」と回答した者は、全体で87名(1.7%)であり、ヤングケアラーという言葉は、十分に周知されているとは言えない。しかし、ヤングケアラーが多く含まれていると考えられるカテゴリⅢ-b-2においては、「聞いたことがあった」という割合が他のカテゴリと比べて高くなっていた(表3)。また、カテゴリⅢ-b-2において、より負担の大きいと考えられる(週に4、5日以上)のケアを担っている、学校のある日に2時間以上のケアを担っている、学校のない日に4時間以上のケアを担っている)者の方が、ヤングケアラーという言葉を知っている者が多かった(表3)。以上のことから、言葉の認知は、高校生が自身の状況を理解することに役立つと考えられる。先行研究では、ケアを担う者が自身をケアラーとして認識する過程について、大人を対象とした場合(O'Connor, 2007)においても、ヤングケアラーを対象とした場合(Smyth *et al.*, 2011a)においても、他者との関わりの影響が大きいことが示されている。

家族に要ケア家族がいる場合、ケアを担うことは、家族として当然のことであり、ケアラー本人にとっては、普通のことと捉えられている可能性が考えられる。また、自身の生活が、他の高校生とは異なっていることについても、自覚していない可能性が考えられる。よって、ヤングケアラーが、ヤングケアラーという言葉を理解し、自身のおかれている状況を客観視することができるよう、周囲のサポートが必要と考えられる。

5. 結論

本稿では、高校生のヤングケアラーとしての自己認識について、ヤングケアラーという言葉の認知および彼らが担っていると回答したケアの状況との関連を分析した。その結果、以下の成果が得られた。

40%の高校生が自身をヤングケアラーだと思つたと回答していた。しかし、この回答は、彼らが回答した要ケア家族の状況や回答者が担うケア役割と必ずしも一致していなかった。要ケア家族がいて自身がケアを担っていると回答した群(カテゴリⅢ-b-2)では16.7%が自身をヤングケアラーだと思つたと回答していたが、26.8%は自身をヤングケアラーだとは思わないと回答していた。また、半数以上にあたる56.4%が「わからない」と回答していた。一方で、自身の家族に要ケア家族がいることを否定した群(カテゴリⅠ)では、3.2%が、ヤングケアラーという言葉の意味を示されたうえで、自身をヤングケアラーだと思つたと回答していた。

以上の結果は、(1)ヤングケアラーは、ケアを要する家族がいることを隠そうとする場合があること、(2)家族のケアを担っている高校生は、自

17 The Children's Society (2013)では、センサスの質問紙には親が回答することが多いこと、「ケア」が求められる状況は様々であるが、その範囲が明確に説明されていないことなどを指摘したうえで、以下のように述べている。

The Children's Society, and many other organisations, knows from our years of experience working with young carers, that many children remain hidden from the view of authorities they so desperately need support from.

また、ノッティンガム大学の2018年9月14日付けのプレスリリース(<https://www.nottingham.ac.uk/news/pressreleases/2018/september/children-england-care-sick-family.aspx>、2019年4月2日アクセス可能)においても、センサスよりも、多くの子どもがケアを担っている可能性が指摘されている。

分自身をヤングケアラーだとはみなさない場合があり、また、彼らの生活がケアを担っていない他の高校生とは異なっていることを必ずしも認識していない場合があることを示唆していると考えられる。日本においても、ヤングケアラーの存在が明らかになってきているが、相当数のヤングケアラーが、依然として、社会から見えない状況にあると考えられる。ヤングケアラーを早期に発見し、支援に結びつけるためには、ヤングケアラーという言葉の認知を進め、ヤングケアラーが自身のおかれている状況を客観視することができるような周囲のサポートが必要と考えられる。

なお、本調査は無作為抽出にもとづいていないが、大阪府の様々な地域・高校において実施しており、調査票の配布数に対して分析対象者数の占める割合も高かった。以上のことに鑑みると、高校生のヤングケアラーとしての自己認識について、ある程度信頼できる結果を示すことができたと考えられる。

謝 辞

本稿は、科学研究費補助金(課題番号:17K04256)を得て行っている調査研究の成果の一部である。なお、開示すべきCOI状態はない。

ご多忙のところ、テーマの重要性に賛同し、ご協力くださった高校の校長、教頭、先生方、そして丁寧に回答してくださった高校生の皆さんに心より御礼申し上げます。

参考文献

- 北山沙和子、石倉健二(2015)、ヤングケアラーについての実態調査－過剰な家庭内役割を担う中学生－、兵庫教育大学学校教育学研究 27: 25-29.
- 澁谷智子(2012)、子どもがケアを担うとき：ヤングケアラーになった人/ならなかった人の語りと理論的考察、理論と動機 5: 2-23.
- (2014a)、ヤングケアラーに対する医療福祉専門職の認識、社会福祉学 54(4): 70-81.
- (2014b)、高校生のヤングケアラー、ねざす 54: 58-64.
- 総務省 平成29年就業構造基本調査、<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200532&tstat=000001107875&tclass1=000001116995> (2019年3月21日アクセス可能)。
- 土屋葉(2006)、「障害」の傍らで－ALS患者を親に持つ子どもの経験、障害学研究 2: 99-123.
- 日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト(2015)、南魚沼市「ケアを担う子ども(ヤングケアラー)」についての調査」《教員調査》報告書、日本ケアラー連盟。http://carersjapan.com/img_share/yc-research2015@minamiuonuma.pdf (2019年3月21日アクセス可能)
- 濱島淑恵、宮川雅充(2018)、高校におけるヤングケアラーの割合とケアの状況－大阪府下の公立高校の生徒を対象とした質問紙調査の結果より－、厚生学 65(2): 22-29.
- 森田久美子(2010)、メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験、立正社会福祉研究 12(1): 1-10.
- Assaf, R.R., Auf der Springe, J. Siskowski, C., Ludwig, D.A., Mathew, M.S., and Belkowitz, J. (2016) Participation Rates and Perceptions of Caregiving Youth Providing Home Health Care. *J Community Health* 41(2): 326-333.
- Becker, S. (2007) Global Perspectives on Children's Unpaid Caregiving in the Family: Research and Policy on 'Young Carers' in the UK, Australia, the USA and Sub-Saharan Africa. *Global Social Policy* 7(1): 23-50.
- Bjorgvinsdottir, K., and Halldorsdottir, S. (2014) Silent, invisible and unacknowledged: experiences of young caregivers of single parents diagnosed with multiple sclerosis. *Scand J Caring Sci.* 28(1): 38-48.
- Cass, B., Smyth, C., Hill, T., Blaxland, M., and Hamilton, M. (2009) Young carers in Australia: understanding the advantages and disadvantages of their care giving. *Social Policy Research Paper No. 38*, Australian Government, Department of Families, Housing, Community Services and Indigenous Affairs. https://www.sprc.unsw.edu.au/media/SPRCFile/26_Social_Policy_Research_Paper_38.pdf (2019年4月2日アクセス可能)
- Cassidy, T., and Giles, M. (2013) Further exploration of the Young Carers Perceived Stress Scale: identifying a benefit-finding dimension. *Br J Health Psychol.* 18(3): 642-655.
- Cassidy, T., Giles, M., and McLaughlin, M. (2014) Benefit finding and resilience in child caregivers. *Br J Health Psychol.* 19(3):

M. Miyakawa and Y. Hamashima, Self-Identification as Young Carers

- 606-618.
- Chadi, N., and Stamatopoulos, V. (2017) Caring for young carers in Canada. *CMAJ : Canadian Medical Association journal* 189 (28): E925-E926.
- Chikhradze, N., Knecht, C., and Metzging, S. (2017) Young carers: growing up with chronic illness in the family - a systematic review 2007-2017. *Journal of Compassionate Health Care* 4:12.
- Clay, D., Connors, C., Day, N., and Gkiza, M. with Aldridge, J. (2016) The lives of young carers in England: Qualitative report to DfE, DfE RR499. https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/498115/DFE-RR499_The_lives_of_young_carers_in_England.pdf (2019年3月21日アクセス可能)
- Cohen, D., Greene, J.A., Toyinbo, P.A., and Siskowski, C.T. (2012) Impact of family caregiving by youth on their psychological well-being: a latent trait analysis. *J Behav Health Serv Res.* 39(3): 245-256.
- Cree, V. E. (2003) Worries and problems of young carers: issues for mental health. *Child and Family Social Work* 8: 301-309.
- Dearden, C., and Becker, S. (2004) Young Carers in the UK: The 2004 Report. London: Carers UK.
- Diaz, N., Siskowski, C., and Connors, L. (2007) Latino young caregivers in the United States: Who are they and what are the Academic Implications of this Role? *Child & Youth Care Forum* 36: 131-140.
- Heyman, A., and Heyman, B. (2013) 'The sooner you can change their life course the better': the time-framing of risks in relationship to being a young carer. *Health, Risk & Society* 15: 561-579.
- Joseph, S., Becker, S., Becker, F., and Regel, S. (2009) Assessment of caring and its effects in young people: development of the Multidimensional Assessment of Caring Activities Checklist (MACA-YC18) and the Positive and Negative Outcomes of Caring Questionnaire (PANOC-YC20) for young carers. *Child Care Health Dev.* 35(4): 510-520.
- Kallander, E. K., Weimand, B. M., Becker, S., Van Roy, B., Hanssen-Bauer, K., Stavnes K, Faugli, A., Kufås, E., and Ruud, T. (2018) Children with ill parents: extent and nature of caring activities. *Scand J Caring Sci.* 32: 793-804.
- Kavanaugh, M.S., Stamatopoulos, V., Cohen, D., and Zhang, L. (2016) Unacknowledged caregivers: a scoping review of research on caregiving youth in the United States. *Adolescent Res Rev* 1: 29-49.
- Lloyd, K. (2013) Happiness and well-being of young carers: Extent, nature and correlates of caring among 10 and 11 year old school children. *J Happiness Stud* 14: 67-80.
- Marote, A.S., Pinto, C.A., da Rocha Vieira, M., Barbiéri-Figueiredo, Mdo. C., and Pedrosa, P.M. (2012) Children as carers: an integrative review. *Rev Latino-Am Enfermagem.* 20(6): 1196-1205.
- Moore, T. (2005) Young carers and education: Identifying the barriers to satisfactory education for young carers. *Youth Studies Australia* 24(4): 50-55.
- Moore, T., and McArthur, M. (2007) We're all in it together: supporting young carers and their families in Australia. *Health Soc Care Community* 15(6): 561-568.
- Nagl-Cupal, M., Daniel, M., Koller, M.M., and Mayer, H. (2014). Prevalence and effects of caregiving on children. *J Adv Nurs.* 70(10): 2314-2325.
- National Alliance for Caregiving in collaboration with United Hospital Fund (2005) Young Caregivers in the U.S.: Report of Findings September 2005. Bethesda, MD: NAC.
- Nichols, K. R., Fam, D., Cook, C., Pearce, M., Elliot, G., Baago, S., Rockwood, K., and Chow, T.W. (2013) When dementia is in the house: needs assessment survey for young caregivers. *Can J Neurol Sci.* 40(1): 21-28.
- O'Connor, D.L. (2007) Self-identifying as a caregiver: Exploring the positioning process, *Journal of Aging Studies* 21(2): 165-174.
- Office for National Statistics (2011) 2011 Census. 例え、<http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20160107224205/http://www.ons.gov.uk/ons/rel/census/2011-census-analysis/provision-of-unpaid-care-in-england-and-wales--2011/sty-unpaid-care.html> (2019年3月21日アクセス可能)
- Pakenham, K.I., and Bursnall, S. (2006) Relations between social support, appraisal and coping and both positive and negative outcomes for children of a parent with multiple sclerosis and comparisons with children of healthy parents. *Clin Rehabil.* 20(8): 709-723.
- Pakenham, K.I., Chiu, J., Bursnall, S. and Cannon, T. (2007) Relations between social support, appraisal and coping and both positive and negative outcomes in young carers. *J Health Psychol.* 12(1): 89-102.
- Pakenham, K.I., and Cox, S. (2012) The nature of caregiving in children of a parent with multiple sclerosis from multiple sources and the associations between caregiving activities and youth adjustment overtime. *Psychol Health.* 27(3): 324-346.
- (2015) The effects of parental illness and other ill family members on youth caregiving experiences. *Psychol Health.* 30(7): 857-878.
- Schlarmann, J. G., Metzging-Blau, S., and Schnepf, W. (2008) The use of health-related quality of life (HRQOL) in children and adolescents as an outcome criterion to evaluate family oriented support for young carers in Germany: an integrative review of the literature. *BMC Publ Health* 8: 414.
- Sieh, D.S., Visser-Meily, J.M., Oort, F. J., and Meijer, A.M. (2012) Risk factors for problem behavior in adolescents of parents with a chronic medical condition. *Eur Child Adolesc Psychiatry.* 21(8): 459-471.
- Siskowski, C. (2006) Young caregivers: effect of family health situations on school performance. *J Sch Nurs.* 22(3):163-169.
- Skovdal, M., and Andreouli, E. (2011) Using Identity and Recognition as a Framework to Understand and Promote the Resilience of Caregiving Children in Western Kenya. *Journal of Social Policy* 40: 613-630.
- Smyth, C., Blaxland, M., and Cass, B. (2011a) 'So that's how I found out I was a young carer and that I actually had been a carer most of my life'. Identifying and supporting hidden

- young carers. *Journal of Youth Studies* 14(2): 145-160.
- Smyth, C., Cass, B., and Hill, T. (2011b) Children and young people as active agents in care-giving: Agency and constraint. *Children and Youth Services Review* 33: 509-514.
- Stamatopoulos, V. (2015) One million and counting: the hidden army of young carers in Canada. *Journal of Youth Studies* 18: 809-822.
- (2016) Supporting young carers: a qualitative review of young carer services in Canada. *Int J Adolesc Youth* 21(2): 178-194.
- The Children's Society (2013) Hidden from view: The experiences of young carers in England.
https://www.childrensociety.org.uk/sites/default/files/tcs/report_hidden-from-view_young-carers_final.pdf (2019年3月24日アクセス可能)
- Warren, J. (2007) Young carers: Conventional or exaggerated levels of involvement in domestic and caring tasks? *Children & Society* 21(2): 136-146.